

「岩稜会冬山合宿前穂東壁遭難記録原本」

12 月 22 日

先発隊として、澤田・南川・若山の 3 名は名古屋より、石原國は新宿よりと、東西呼応して夜行に乗り込む。

12 月 23 日 雪

松本にて 4 名合流。島々に着く頃より、激しい雪となる。バスにて沢渡に至る。吹雪の中、膝まで潜るラッセルと背中の中荷にあえぎ、今日は坂巻泊と定める。

12 月 24 日 曇時々雪

昨日、我々の後を追ってラッセル車が入ったのであろう。中の湯まで快適にラッセルされた道にピッチがはずむ。ガマトン(釜トンネル)にてスキーを着ける。大正池に達すれば、残念にも穂高の稜線はガスに覆われているが、矢張り、なつかしいかぎりだ。冬山への気分が急に湧き溢れる。

ホテルにて昼食後、私の荷揚げ品を整理し、明神養魚場へと向かう。小梨平はすっかり雪に埋もれ、あの繁雑な夏の片鱗すらも思い浮かばない。

明神の吊橋が強風のため橋板がはずれてしまっており、途中より河原に飛び降りる。

夜、パタパタして舌打ち。豪勢なクリスマスキャロルに聖なる夜をたたえる。

12 月 25 日 雪

今日は松高ルンゼ下迄荷揚げの予定だ。小屋の裏より夏道帰り森林帯をしばらく行き、河原に出る。これを奥又白出合いまでつめる。全員快適だ。河原伝いに、スキーを並ばせ、左岸ガレーの手前で、左側灌木帯の小道に入る。急な登りとブッシュに悩まされ、各人の足取りもようやくばらばらになり勝ちである。灌木帯を抜け、右側、丘の大岩の所をデポ地と定め、長居は無用、一気に降る。出合いに達する頃より、吹雪が物凄くなり雪だるまとなって小屋に転がり込む。

12月26日 雪

快適な養魚場を後に、いよいよ奥又白へと向かう。馬力をかけて荷物をかついだ為、昨日とは打って変わったピッチで進む。昨日のシュプールは消されている。出合いを過ぎた頃より、輪カンの跡が延々と続いている。先を越されたかと気にしながら登って行くと、ラッセルは途中で分かれ、八峰側稜へと続いている。多分、大阪市大のパーティだ。昨日のデポ地に天幕を張り、のんびりと栄養の補給に努める。

12月27日 曇のち雪

澤田、石原國、若山、宝の木までの荷揚げ。南川風邪のため天幕にて休養。松高ルンゼ下のデブリは少ないが、幾度かの行き来のため、安全第一と中畑新道にラッセルをつけることに定める。さすがにこのラッセルは厳しい。ガスに閉ざされた中を、ただ身体を1cmでも前へと努力が続く、ようやく灌木帯を抜け、宝の木を左横に見て、トラバースに移るラッセル、若山が驚異的な馬力を出す。左手に持ったストックを水車のごとく振り廻し、胸のあたりの雪を、かき分け、かき分け宝の木へと進む。全く閉口だ。くたくたに疲れ感激もあったものではない。

荷物を放り出し、天幕へ降りる。夕刻、下又、あるいは明神か、しきりに遠雷の如き雪崩の響きが身に沁み入る。

12月28日 曇

今日も荷揚げだ。若山は今日は休養の筈が、出発の準備も終え、天幕の外に飛び出した途端、アラヨ！の声が入る。部隊長だ。こんな朝方に来るとは珍しいことだ。部隊長も、休養することにして、3人で出かける。昨日のラッセルのお蔭で、ピッチは弾む。2時間に少しで、宝の木に到着する。前穂側は、全然見えぬが、四峰は下半分をのぞかせて、挑戦しているかのごとく、我々のファイトをかきたてる。今年はまだ雪が少ないのであろうか。蝶、大滝の山々も、すっかり冬装束では覆われていない。のんびりと楽しみながら下りに移る。

いよいよ待望の又白池での天幕生活に入れるぞ。この半年、夢にまで描いた冬の奥又白、

しかもなお黒々と雪をも許さぬ、岩壁に囲まれながら。夜、久しぶりに部隊長を迎え、明日よりの期待に満ちながら、大いに話しがはずむ。

12月29日 曇

天幕を撤収、スキーその他をデポし、池へと向かう。中畑新道も、三度目ともなれば、国道級だ。写真を録り、録りゆっくりと進む。池へ着けば設営作業だ。10日間の生活だ。快適に張ろう。ブッシュも沢山敷いて。瞬く間に、6人用ウィンパーが2張見事に張られた。夜中よりぐんと冷え、冬の星が輝き始める。一応明日の準備にかかる。

12月30日 曇

余り感心しない天気だ。しかし、B沢及び平谷のラッセルと偵察を兼ねて、7時半、石原兄、石原國、澤田は出掛ける。思ったより雪がしまっていて、ラッセルの苦労も少なく、B沢に入る。狭いB沢を恐る恐る登って行く。右岩稜、北壁の積雪状態は非常に少ない。北壁直下までつめて、しばし北壁を凝視している途端、頭上Dフェースの上から雪のブロックが落ちて来てあわやと思われたので、ほうほうの体で天幕に戻る。午後休養。お好み焼きを始める。豊富に持ったレバーも心強いがぎりだ。

12月31日 雪

終日リビ。朝方、高井兄弟が天幕に到着す。昨日、中畑新道下部でビヴァークを余儀なくされたそう。しかも、明神の最南峰で東雲の方が遭難されたという、噂話をもって。

雪はしんしんと降り続けている。一体いつになったら青空が見えることだろう。12月晦日、29年度もこれで終わりだ。

2日には若山は帰宅せねばならない。

余白部分に記載…◎高井君の天幕着の日、これで良いですか？30日、天幕着ではなかったですか？

1月1日 晴

詳しくは岳連会報。

3時半起床、6時天幕発。石原國、若山、澤田の order。

7時30分 B沢上部でアンザイレン。

8時 北壁取付。

11時 スノーリッチ。

15時10分 第二テラス、Aフェース直下。

17時半 B.P 地点。

19時 ビヴァーク。

テント人員 石原兄、高井兄弟、南川、上岡さん 13時テントに到着。

高井兄、アタック隊の帰りがないので、夕刻、A沢下迄行くも連絡取れず？

松田、北川、室、森、太田、名古屋発

1月2日 雪

8時行動開始。

石原トップを若山に交代(9時)。

9時20分、スリップ、墜落。

天幕に向って救援依頼、「了解」の返事。

14時半、高井兄と若山の墜落と現在位置の連絡がつく。テントでは、石原兄、上岡、高井兄、A沢より東壁隊のサポートに出発。途中救援依頼の報せを受け、高井兄、上岡は更に登り第二尾根で石原國、澤田と連絡がつく。

石原兄は直ちに天幕に降り、高井弟を連れ、救援隊の依頼にホテルに下る。途中中畑新道にて関西登高会の方に、更に徳沢にて早大 OB 三名の方に救助を依頼。上高地より神戸に電話及び電報にて連絡。坂巻にいる後発隊に連絡。

高井兄、上岡はラッセルの重荷と、時刻が遅いので、天幕に引き返す。

南川テントキーパー。

坂巻にて松田、室、森、北川、太田、遭難の報せを受け、直ちに腹痛の松田、太田、森を残して室、北川はホテルに上がる。

関西登高会、又白池に B.C 設置。西糸屋 2 名(上高地で救援の依頼を受け)徳沢へ。

1 月 3 日 雪

・ 10 時 20 分 ガスの切れ間より、天幕よりラッセルの跡がくっきり見え、これをたどって行けば、4 つの黒点が A 沢に向っている。14 時、高井兄が頂上よりアップザイレンで降って下る。石原國救助の後、澤田も B.C をあとにする。(14:40 分)

17 時前後、相次いで天幕に迎え入れられる。(詳細下記)

・ 上岡、高井兄、5 時天幕発。猛烈なラッセルに苦しみ、登高会 3 名及び徳沢よりの西糸屋 2 名、早大 O.B 3 名に追いつかれる。頂上より 2 名を引き揚げ、天幕に降ろす。高井兄は後始末の為、少し遅れる。

・ 森、室、池の B.C に向うも、途中道を誤り思わぬ時間を喰い 16 時頃着く。

・ 松田、太田、石原兄、高井弟、徳沢へ。北川は養魚場のキーパーに。

・ 石岡、赤嶺、三林、新井、早朝名古屋発。稲核で銀ちゃんを依頼し、ホテルに向かう。

24 時着。

・ 清水、夜行にて新宿発。

・ 西糸屋、早大の方は徳沢に降りられた。

1 月 4 日 晴のち曇

石原國、澤田は登高会梶本氏に凍傷の治療を受く。

石原兄、松田、太田、三林、小林(銀ちゃん)、高井弟、天幕着。10 時頃。

室、早朝連絡の為下山。ホテルより再び徳沢まで上がり、救助隊と連絡後ホテルへ下る。

11 時、高井兄、上岡、森、小林、高井弟は、澤田、石原國を降ろす。松高ルンゼは尻セードで降りるが、それより澤田は、ルンゼ下で一緒になった新井を加えて、代わる代わる皆の背におぶさり、夕刻養魚場に到着。

石原兄、松田、太田、南川、三林は若山の搜索の為、天幕に残留。

石原兄、松田、午後 B 沢に捜索に行くが、むなしく引き返す。

赤嶺、飯田氏、小山氏、それに夜遅く着いた清水は、養魚場に上がり、澤田、石原國の凍傷の治療を施す。24 時過ぎ。

石岡はホテルにて神戸とたえず連絡をとる。

中道、佐野、西川、黒田、浅井、毛利、大北氏、岩瀬氏、三宅氏、若山氏(朝発英太・夜発富夫)名古屋発夜行。

1 月 5 日 曇のち吹雪

又白池の天幕、捜索隊は猛烈な雪に 1 日休養。

小山氏、山本氏、森、捜索隊に合流する為、天幕に上がろうとするも、中畑新道の猛ラッセルに引き返す。

上岡、赤嶺、清水、高井兄、小林氏、飯田氏、新井は石原國と、そりに乗せた澤田をホテルに降ろす。11 時、ホテル着。北川ホテルへ。

ホテルにて神戸との連絡を取り、凍傷治療の急を要する澤田を取り敢えず降ろし、石原國はしばらくホテルで静養することにする。

赤嶺、上岡、清水、高井兄、飯田氏に新たに応援の太田、小松両氏に引かれて澤田が 1 時出発す。ホテル前広場にて、毛利、浅井、西川、佐藤、三宅氏、若山氏と出会い、毛利、浅井、西川、佐藤は直ちにそり隊に合流、下る。更に、大正池附近で、中道、黒田、大北氏、岩瀬氏と出会い、大北、岩瀬氏は共に降る。猛吹雪の中、連日のアルバイトに疲労甚だしく、全員くたくたになって沢渡西村屋に着く。17 時。

19 時、松本より迎えのハイヤーに、上岡、赤嶺、高井兄弟、澤田、飯田氏、岩瀬氏、大北氏の 8 名乗り込む。他は西村屋泊。

- ・室早朝下山、中道さん一行と雲間の滝で会う。

- ・中道、黒田、三宅氏、若山兄弟、ホテルへ。中道さん石原國の凍傷治療を施す。

澤田は、松本信大病院で治療の後、一同と共に 0 時 40 分、名古屋行に乗り込む。

1 月 6 日 雪

又白天幕 停滞

三宅氏、若山兄弟下山。佐藤、西川、汽車にて帰神。上田、伊藤、林、夜行にて名古屋発。小松氏、太田氏、清水、新井、毛利、浅井、沢渡よりホテルへ。石岡、黒田、北川、中道、石原國木テル。

澤田、名大病院入院。

前穂高岳東壁遭難報告書

沢田栄介・記

(下線は編集者による)

昭和 29 年 12 月 22 日 先発隊として、石原_弟、沢田、南川、若山の四名は勇躍して、上高地へ向った。明神池養魚場を経て、丈余の積雪を踏みわけ、又白池宝の木付近へベースキャンプを設営し、荷揚げを終えたのは 29 日であった。此の間、リーダー石原_兄の参加をみ、いよいよ好天気を待っての体勢は整ったのである。石原兄弟、沢田は偵察とラッセルを兼ねて B 沢上部まで行く。ここから眺めた東壁下部、即ち、北壁と称する部分は雪も沢山つき、一見したところ、登攀は容易であるとの印象を得たので、一同満足な気持で天幕へひきかえした。31 日は泣き出しそうな空から雪が舞い下っていた。午後、高井兄弟が参加した。いよいよ 29 年も終りである。

明けて元旦、午前三時、満天の星にとび起き、急いで準備にかかる。パーティは三名とし、石原_弟、沢田、若山の新人で編成した。六時になってようやく明るくなったので、見送りの友人と握手し、石原リーダーの激励の言葉を後に天幕を出発した。天候は全くの快晴だが、非常に寒い。全員非常に快調で、腰までもぐるラッセルもなんのその、アタックの喜びに燃えた我々はぐんぐんピッチをあげていく。七時十分、インゼルの中程で、折からの御来光を仰ぎ、その神々しさに全く魂をうたれた。

7 時 30 分、B 沢上部でアンザイレンをする。オーダーは石原_弟、若山、沢田の順である。テルモスのミルクをあけて、チョコレートを囓り、いよいよ高距 150 米、傾斜 60° の北壁に取りつく。8 時、ルートは昨年夏のルート、即ち、一番左側、右岩稜寄りが容易とみられるので、これを採る。まず、D フェース基部に沿って一ピッチ、それから左上方に一ピッチと雪の斜面を登り、次に 4 米のクラックにハーケンを一本きかし、先人のハーケンを利用して乗り越え、チムニーの基部に入る。雪の状態は全く悪い。岩の上に乗っている雪は固まることなく、さらさらと落ちてくるので、アイゼンのツアックが全然きかない。トップは全く大変で、雪をかき落して登らなければならない、思わぬ時間の消耗をきたした。約 6 米のチムニーに 3 本のハーケンを打ち、やっとのことで、ここを切り抜けて上部の雪のリッジに出る。いよいよ難関の第 2 テラスへ抜ける約 40 米の岩壁に向う。傾斜もぐんぐんと増し、非常に困難に見える。しかしながら、我々の闘志は全然おとろえず、かえって奮いたつただけであった。トップは左側のチムニーをさけ、右側のフェースを微妙なバランスで登り、次に、チムニーに沿って五米登ると、行先ははたと止った。オーバーハングである。ハーケンをきかして、物凄いファイトでこれを越える。非常な悪場である。チムニーの左側へトラバースする。石原の姿が現れ、大きく左に廻り込んで第 2 テラスの末端の雪の斜面に再び姿を消した。此处でザイルの間隔を変え、石原と若山の間を 30 米にし、若山をハング下まで登らせる。やがて、ザイルがピンと張り、アラヨッの声が聞える。1 時 50 分、丁度、こ

の時第4峯頂上から、大阪市大のパーティの激励の言葉を受ける。セカンドの若山はどうしても此のハングが越せないのか、上からの懸命の確保があるにもかかわらず、非常に苦しんでいる。突然全く、突然ザザーと、左側のチムニーを滑り落ちる雪と共に、上のザイルが物凄く緊張した。どうしたと声をかけたが返事がない。上から驚きの声が聞えて来た。オーバーハングの乗り越しに力つき、そのままズルズルとチムニーに滑り落ちたらしい。そのままの姿勢でいるように声をかけ、沢田はハング下まで登り、元気ついた若山を元の地点にあげ、肩車でハングを越し、左へ廻り込んで第2テラスへ出たのは14時50分であった。直ちに、ベースキャンプへ向って、ヤッホーをかけた。第2テラスの急な斜面を2ピッチ登り、Aフェース下にやっと15時10分についてた。

遅い昼食をとり、甘納豆をほうばりつつAフェースを懸命に注視する。Aフェースは高距約80米で、傾斜65度あり、北壁に比して積雪が少ない。

此の頃から、さしもの快晴もようやく薄もやがたちこめて来た。天幕に向ってヤッホーと呼びかけた後、直ちにとりつく。時まさに3時半である。右側ルートを忠実に登る。1ピッチ後、夏には問題でない細いクラックが非常に悪い。ハーケンを2本打ち、アブミを使用する。次は傾斜は緩くなるが、スラブ状の岩に不安定な雪がべっとりとなついていて、全く感じの悪い所である。足元が今にもくずれ落ちそうな所を慎重に登る。

もう日がとっぷり暮れる。時計を見ると5時半である。頭上30米程に見える頂上のスカイラインがおいでおいでをして差招いているようだ。ザックからライトをとり出して、頭上につけたけれども、矢張り視界はきかず全く致命的であった。仕方なくビバークと決心する。併し、この地点では、身体一つかくすところもないし、それどころか安全な足場一つ探すことも出来ない。一寸暗然たる気持になる。すると、突然、石原が喜びの声をあげた。ピッケルで雪をかき落していた時、偶然にも岩のくぼみを発見した。漸く安堵の胸をなでおろし、そこへ集結して、雪を掘り出し、巾1米20、高30糎、奥行き1米の穴を作る。そこへ三人が並んで腰を下し、足を投出して穴の中へ入れる。併し上半身は全然外へ出ており、特に尻が半分しか乗っていないのである。気をゆるめると、今にも真逆さまに第2テラスへ落ちてゆく様な気がする。各自ピッケルで完全なるセルフビレイを行う。18時になって、真黒な空からは粉雪が舞い始め、前途多難を思わしめるが、明日へ希望をつなぎ、ツェルトを冠り、昼食の残りを噛みしめる。身動き一つ出来ない姿勢のために、セーターも着る事が出来ない。アイゼンの紐はコチコチに凍結してしまった。凍傷を心配して、ともすると、ゆるむ心をはげまして、懸命に靴の中の指を動かす。寒さは全くはげしい。それでも疲れているためかうとうとしかけるが、矢張り眠れない。足はじーんとして感覚が失われてゆく。今頃、下の天幕ではどうしているだろう。我々の帰りの無いのを何と想像しているだろう。ラヂュースのうなっている天幕の中で暖い雑煮で満腹して居る仲間の顔が目に見え。今日は元旦な筈だ。

何故、我々はかくもして山へ登らなければならないのだろうか。唯だ山の呼ぶ声に夢中になって良いのだろうか。

何時の間にか、左側の若山がやすらかな鼾をたて始めた。漸く、落着きを覚え再びうとうとす

る。三時頃であろうか、三人共ぱっちり目を覚す。体中一面雪で埋っている。非常な寒さだ。互に身体と身体をぶっつけて暖をとる。固型メタに点火しようとするも、吹き込む風と雪とでたちまち消えてしまう。火の消えた後が全くやりきれない。5時6時と時計の進むのが、蟻の歩みよりのろくさい。

漸く明るくなり始めたが、依然雪が止まない。ツェルトから体を乗り出せば、みるみる中に、ヤッケ共に体がこわばってしまう。暫く、暖くなるのを待って行動を開始することにした。

8時になって、石原が先ずビバーク地点の左側を調べる。そこはスラブ状の所へ新雪が附いて、全く不気味な程不安定にみえる。それでも、4米程登ったが、今にも雪が落ちそうで、引返した。今度は右側のチムニーへ取付く。約2米上に岩の突起があり、更に、その上3米の所に顕著なオーバーハングをなす突起がある。此处を越すのがヤマ場と見られた。ハング下までは難なく登り、突起にザイルをかけ、これを手がかりにして真正面から乗り切ろうとしたが、昨日の疲れのため、どうしても乗越せない。暫く休憩の後、二度、三度と試みたが矢張り駄目だった。そこで、オーダーを変更して、ミッテルの若山が先頭となり石原と交代する。

若山も石原と同様に、難なくハング下に到り、突起にザイルをかける。暫く真正面から乗越そうと試みていたが、駄目なのか、今度はザイルを突起にかけたまま、右側岩壁に沿って逃げ切ろうとして、一步トラバースを開始して、直登にかかろうとした瞬間、「アッ」と一声叫ぶと共に、右足をスリッパした。下で懸命に確保して居た石原の足に触れて、姿は消えてしまった。不思議にも墜落によるザイルのショックが全然ない。おそろおそろザイルをたぐってみる。これはなんとしたことか、8糎強力ナイロンザイルがぶつつり切れている。恰も鋭い刃物でたち切ったように。「五朗ちゃん、五朗ちゃんー。」と第2テラスに向って必死になって叫ぶ。9時20分、更に声を張りあげてどなっても応答がない。暫くは呆然として言葉が出ない。ようやく気を取りなおして、天幕へ向って「ヤッホー」を連呼し、救援を依頼する。天幕からは直ちに「了解」という力強い石原リーダーからの応答があり、ついで南川の返事がある。

再びビバーク地点へ腰を下す。このまま救援を待つか、或は第2テラスまでアップザイレンド下り、若山を捜し、左側V字状雪渓へ向ってトラバースして逃げるか、或は自力でAフェース最後の20米を登り切るか、方法は三通りしかない。併し乍ら、疲れ切った身体には、このショックは余りにも痛手だった。登攀の自信を失った我々は救援に来る友を信じ一日でも二日でも待つことにした。雪は休みなく降っている。昨日声をかけてくれた大阪市大のパーティもこの雪では前穂高岳の頂上へは登れないだろう。

暫くツェルトをかぶっている内に、漸く身体も休まった。すると第2テラスへどうしても下らなければならないという考えが強力に支配し始める。

アップザイレンの準備にとりかかる。先ず、石原が下り始めたが、第2尾根近くで、救援隊らしい声がしたので留った。ヤッホーをかける。突然、高井君の声が間近かに聞えた。「元気か」。「ザイルが切れて五朗ちゃんが落ちたんだ」。「落下地点は」。「わからん」こんな言葉がかわされた後、アップザイレンをやめ、もとの地点へ腰を下す。14時半である。

A沢から頂上に到る所要時間を幾度も幾度も計算し、二人で話し合った。16時半になっても、

救援隊の来る気配もない。不安な気持ちが湧き始めた。併し、石原リーダー、高井^兄、それに東壁の大先輩上岡さんも天幕に居られる筈だ。絶対来てくれる。こう確信してからも、互に見合す眼と眼、顔には力がない。5時半、日も暮れはてて、再び飢えと寒気にさいなまれる夜を迎えなければならなかった。天幕に向って叫ぶ声も疲れて声とならない。これぐらいで参ってたまものか。明日こそはがんばると、互に励ましあう。段々と睡魔がおそってくる。此のまま眠ってしまおう。何時までも山は我々を守って居てくれるだろう。彼等の懷に抱かれつつ何時かねむってしまった。

午前4時頃か、厳しい寒さに夢が破れた。とても堪えられない寒気だ。雪は依然として、しんと降っているが、風が比較的少いのありがたい。

やっと長い長い夜が明けた。陽があたり始める。ツェルトをぬいで天幕へ向って叫ぶ。声が枯れると笛を吹く。天候は回復しつつある。一時間おきにヤッホーをかける事にする。9時、今一度昨日のチムニーに取りつく。矢張り駄目だ。これしきのハングぐらいなんだと負けおしみを言いながらツェルトをかぶる。

10時20分、ヤッホーをかけようと天幕の方に目をやると、天幕の上部の丘の地点をラッセルの跡がくっきりと走っているのが見える。更にその跡をたどると、黒点が四つ上に向って動いてくるのが見える。嬉しさの余り、

す。今度こそ3時までには来るだろう。突然、頭上から、ヤッホーがかかる。「ここだ。ここだ」と合図する。暫く待つ。すると高井^兄の見事なアップザイレンが現れる。「よう頑張った……」感激に何も言葉が出ない。

持ってきてくれた暖いミルクを飲んで少し元気が出て来た。引揚の準備にかかる。二日間のオカン場となったこのテラスに感謝を捧げ、はるか下の第2テラスへ向って合掌する。「友よ、安らかに眠れ」と別れを告げる。

先ず石原が頂上からのザイルに身を結び、登り始める。ルートは左側スラブ状の方だ。14時40分、続いて沢田が登る。腕の力が全然ないので、上からの力強い引揚げに頼るより仕方がない。頂上では上岡さん始め、早大OB、関西登高会、西糸屋の方々の暖い手に迎えられた。やがてA沢を経て、17時10分、無事ベースキャンプへ達した。

夏期搜索行 昭和30年7月15日－8月4日

搜索遺体発見から収容まで

7月15日

名古屋発22時40分長野行準急にて南川・沢田・常保・今井出発する。

7月16日(晴)

松本よりバスにて上高地に向う。大正池の畔のカーブを曲った途端、あまりにも残雪の少いの一同先ず驚かされる。石原^国が北穂小屋から迎えに降りて来てくれていた。この分なら案外早く発見出来るのではないかと早々にホテルにて荷物をまとめ、養魚場を経て出合着が16時頃、

(2)

[illegible]

12月28日 量

[illegible]

12月29日. 雪.

天幕を捲くや、又一其の他を「ア・リ」池へてつゝ、中島街道も、三度目ともなれり。
国道改め、宮兵衛橋より橋り、かついで進む。池に著けり「沼管作等」云々
10月1日の生活記、小大遠いところ、フジ江も沢山 ~~ある~~ 数に。
宇佐川内へ、大人印、ウレシ - ²³⁸入見事へつゝられた。夜半刊、ふんこ寺と、
笥の屋敷、輝き始む。一夜 10日の方幕をひらき、

12月30日 曼.

余り感心する元気で、而し、B沢各平谷の知恵と、傾斜を兼ねて、ワザ半、石原丸、石原の沢田は、お4対丁子。思つたリ雪か！⁽¹⁾⁽²⁾。知恵の考案も少く、B沢に入ら。狭いB沢下印と、思ひ、望み行い、右岩橋、北陸の護衛松懸に非常の少く、北陸道下迄つめて、いざ北陸を凝視し、途端、頭上D-2のEから雪がB沢で落ちて来。あわやと思ふので、~~赤~~ほうほうのいで、天幕に突入。午後休養、おけり焼を始める。豊富な情報、バーと心強がりだ。

12月31日。雪。

翌日7時、雪止し（午後降）つづいて、西方、高井久第の天幕に到着す。昨日、印各新道
下部はビラ-が土俵儀を至れり云々。而して明神の境内で東雲の方へ遷移せしむる勢あり。
一俟何時かの間に高宮の見計事なり。10月29年初め此の地に移るべし。
②2日の午前中に決定せられたるなり。

⑩ 高井 君の天幕着のは どれで 良"い"ですか？ 三十日、天幕着 であるのか、
で"す"か？

3

1月1日 晴

詳見 康運會報

三時半起床，六時半蒞瑞。石原、若山、沢田のorder, 17時30分, B沢上江崎江崎
8時の上陸取付。11時, 2日1-14分。15時10分, 舟-732, A22-2西下。
19時半, B.P. 地質。19時, ~~B~~ 5分-7。

工作人员 石原久、高井兄弟、南川、上田工、13日、7人到着。

●高井見、アタック隊の帰りの道で、夕刻、A沢下迄で行くも連絡とれず”？

和日, 比日, 定, 新, 太日, 各古气味.

若山¹⁹⁵⁵现在位置

1月2日, 雪。

8時行部浦船、石原卜一、吃若山に交代(9時)、9時20分、21141、墮落、天幕の向に救援依頼、「了解」の返事。11時30分、高井と連絡OK。

千二七は。石原兄、上岡、高井、^{高木}平陸隊の^{本部}年下の出陣。途中政治地位の執と
を争い、高井、上岡は更に増り、千二七隊は石原兄と通つた。

石原氏は直に、天幕の下り高井第27丸、取巻隊の夜襲に成功した下、

通中中島新道に、南西塔高会の方へ、更に徳見の早大0.13、2号の和歌歌の歌歌
上京地所神の電路の電報の通路、通路の夜繁路の通路。

高井元、上田作三郎の重荷と、時刻の違いの事、次第に引返す。

南川), 7217-11—,

好巻に、松田、室、新、比川、石田、蓮野の報せを蒙り、直うに、豊、伯、希の松田、石
 森を破し、小、ア、い、新、よ。

由而署名会 2月池以 B.C 设置。 西尔层2名(1名池以和1名依段三(1)使派。

173日雪

10時20分 川2の中央内F₁、元幕F₁より川の跡に(つまり)見^た。二枚は~~透~~^透つゝ、11時17分、
10分^{ALR}異変が、~~その~~向^方に。14時、西井²の、頂上F₁ P₁の、サイロに降^り、下^り。
石原¹、援助¹の、泥田¹に、P₂を¹与^へる。(14.40分)
11時¹前後、相¹つ¹い¹じ、元幕¹に¹迎^へて¹く¹れ¹さ¹れ¹る。

上圖、高井久、五階元幕端、這處為300cmの高井久、登山會3名、西手~~高井久~~高井久、
從IRFの西手²名、早太0.15gの通²つた。頂上2名を314m、元幕に降了、
上圖、高井久、後村の、少い。

森、佐 現のBCに10分、途中道を譲り思わぬ所で10分、16時頃着。

、 採用、任用、解任、高昇等。使況へ。 北川市 花浪場の 7-10-11.

、石炭、赤土、三林、新河、早期为丘陵。物产以金银为主。下田(町) 240户。

· 清水 施行の二新信等

、西系层 早元古界下统泥盆纪沉积层。

240g

④

1月4日. 晴後曇.

石原系沢田、下野高会 掘耳機、二重窓の治源を答。

石原久、中川、太田、三林、小林(現出) 古井、天幕着

空早朝連絡の事。下山。亦、心より、両方、統一の上、
~~連絡の事。下山。亦、心より、両方、統一の上、~~

[illegible]

石原、秋田、大田、市川、三林に吾山の櫻京に流行の名天喜の群衆、
石原、秋田、市川、大田に櫻京に流行の名天喜の群衆、

[illegible]

石田正和氏の「神代文」研究を乞ふ。

中道、站前、西川、黑田、磯井、毛別、大比、若瀨、三友、乃乃屋、夜行、若山、

1月5日 最後吹雪

又曰池の天帯横有、陛下温熱を要し、一日侍奉。

小出は、山崎~~氏~~女。森。櫻井隊に合流する迄、元幕の上のり万石中島新造の種
子に似て居る。

上海、苏嘉、清水、高井、小林氏、白石田村、新村、石原、
求下儿以降子，11月、求下儿者、

ホナにいて神々の連絡を取り、凍傷の治療の必要を決定し、~~神~~を助けた。
降し、十分なほど下で~~降~~おいて治療を完了させた。

手帳に(1) 清水、高井、石田、新、太田、小松、西村、引かれ
泥田、1階出峰、下、前、石田、毛利、浅井、西村、佐藤、三度、葛山
とある、毛利、三度、西村、石田、引かれ、下、

更に大西地受着の、中道雲は、大北地、岩部域に出展し、大北、岩部域に於
其に降る。強風雲の中、逐日の雨雲は、二層の雲で、全雲は、
右の図に示す雨雲の如し。17時。

19日、松平町の四丁のハヤシ、上岡、赤坂、高井兄弟、沢田、白石、高野、
大友の5名来り込む。他に、西村尾羽。

、宜早翻下。甲連土一併に雲内9流に合す。

、中道、異田、三波、若山兄弟、赤子八人、中道以石原のり、澤田治康を討ち、

浪田は、松本信玄病院で1名療の後、一同と共に10時40分、石巻行の列車に上

1960. 庫

~~小坡地~~ 又曰元蒂 邱帶。

绕山麓山又并。下山，所存：西川、晁冲之、归神、口日、印政、林、夜行以记、阮籍
小~~我~~成万日战、高水、新井、毛州、三教、沈洛、所心、石同、器日、所、中送、石原、丁所
况旧、70下源改入院。

OK. 70% 100% 100% 100%

83

三重大学山岳部
会報

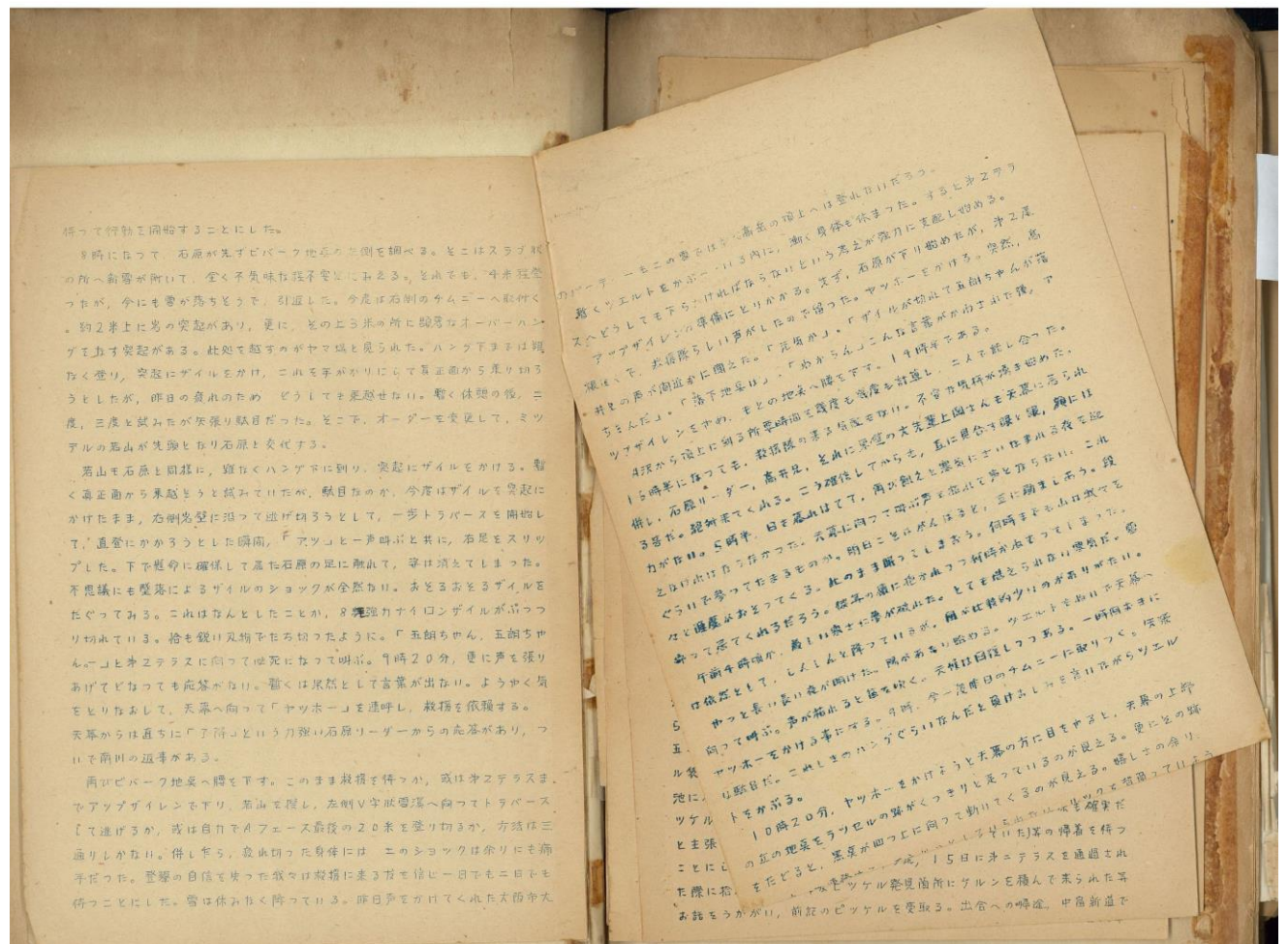
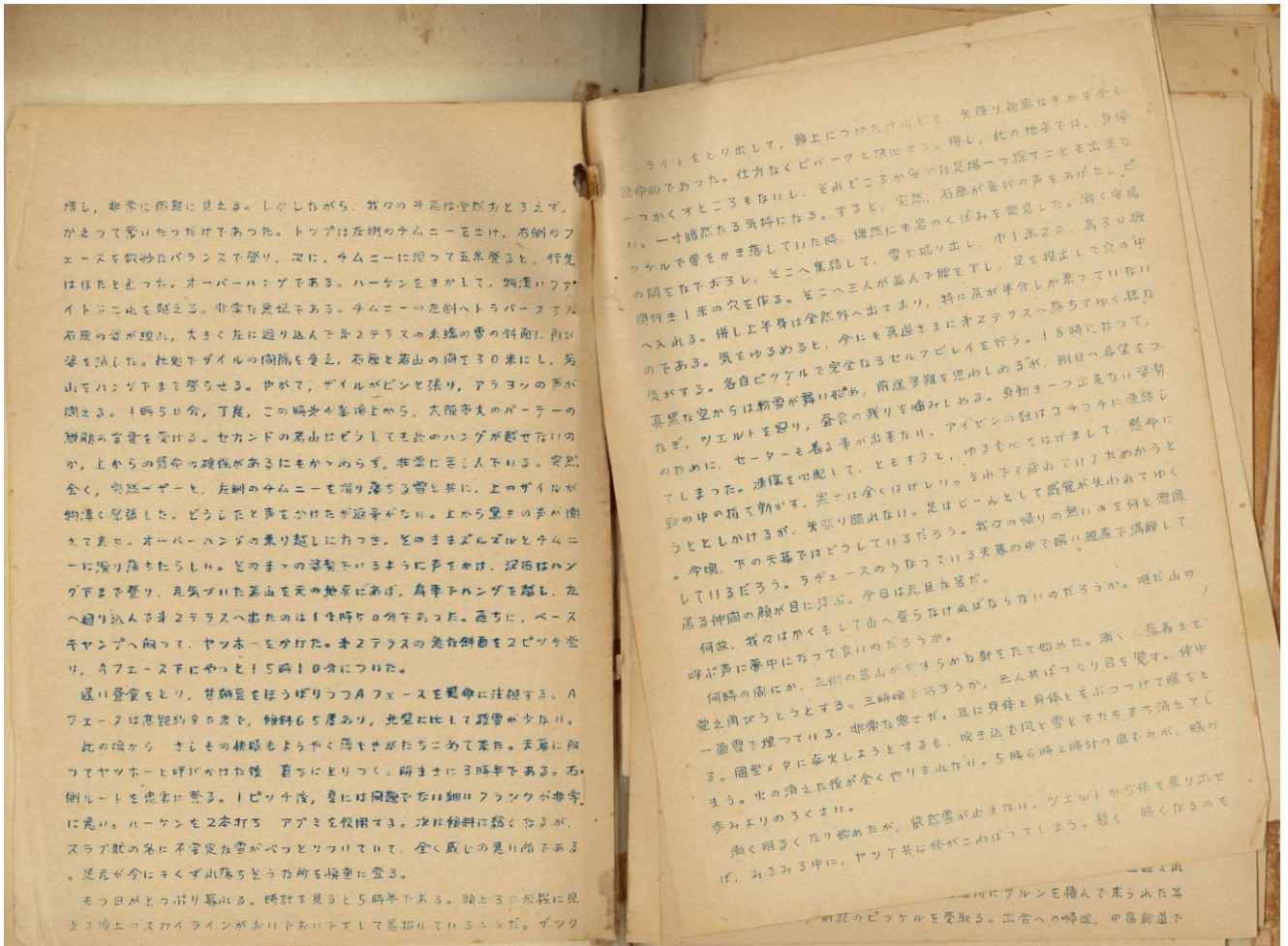
前穂高岳東壁遭難報告書

沢田 伸介・記

昭和29年12月22日 先発隊として、石原弟、沢田、岸川、若山の四名は勇躍して上高地へ向った。明神池養魚場を経て、丈余の積雪を踏みわけ、又白地室の木附近へベースキャンプを設営し、荷揚げを終えたのは29日であった。此の間、リーダー石原兄の参加を、いよいよ好天候を待つての体勢は整ったのである。石原兄弟、沢田は偵察とラッセルも兼ねてB沢上部まで行く。ここから眺めた東壁下部、即ち、北壁と称する部分は雪も沢山つき、一見したところ、登攀は容易であるとの印象を得たので、一同満足な気持ちで天幕へひきかえした。31日は流し出しどうな空から雪が霽り下っていた。午後、高井兄弟が参加した。いよいよ29年も終りである。

明けて元旦、午前三時、満天の星にとび起き、急いで準備にかかる。パーティは三名とし、石原弟、沢田、若山の新人で編成した。六時になつてようやく明るくなったので、見送りの友人と握手し、石原リーダーの激励の言葉を後に天幕を出發した。天候は全くの快晴だが、非常に寒し。全員非常に決闘で、贈までもぐるラッセルもなんのその。アタックの喜びに燃えた我々はぐんぐんピッチをあげて行く。七時十分、インゼルの中程で、折からの御来光を仰ぎ、その神々しさに全く魂をうたれた。

7時30分、B沢上部でアンザイレンをする。オーダーは石原弟、若山、沢田の順である。テルモスのミルクをあけて、チョコレートを嗜み、いよいよ高距150米、傾斜60°の北壁に取りつく。8時、ルートは昨早夏のルート、即ち、一番左側、右岩稜割りが容易とみられるので、これを選ぶ。先ず、Dフェイス基部に据うてピッチ、それから左上方に一ピッチと雪の斜面を登り、次に4米のクラックにハーケンを一本まかし、先人のハーケンを利用して乗り越え、ナムニーの基部に入る。雪の状態は全く悪し、岩の上に乗っている雪は固まることなく、さらさらと落ちてくるので、アイゼンのツアツケが全然きかない。トップは全く大変で、雪をかき落して登らなければならず、思わぬ時間の消耗をきたした。約6米のナムニーに居る本のハーケンを打ち、やつとのこじで、ここを切り抜けて上部の雪のリッジに出る。いよいよ難関のオステラスへ抜ける約40米の岩壁に向う。傾斜もぐんぐんと



This is a hand-drawn map of the Shuangchi River (雙池河) area. The map is drawn on aged, yellowish paper. It shows the river's course, surrounding mountains, and various place names in Chinese characters. The river flows from the top left towards the bottom center. To the right of the river, there are several mountain peaks and valleys. The map includes several place names, such as '雙池河' (Shuangchi River) at the top, '雙池' (Shuangchi) in the middle, and '雙池' (Shuangchi) at the bottom. There are also some numbers and other markings on the map.

夏期搜索行

昭和30年7月15日-8月4日

捜索・遺体発見から収容まで

7月15日

名古屋発 22時40分 長野行 準急にて 南川・沢田・常保へ 井出 発す。
7月16日 (晴)

7月16日 (晴)

松本よりバスにて上高地に向う。大正池の畔のカーブを曲つた途端、あまりにも残雪の少いのに向生ずる驚かされる。石原氏が北麓小屋から池へと降りて来てくたへた。この分は早外早く発見出来るのではな
いか……と早々にホテルにて荷物をまとめ、養魚場を経て出合者が16
時頃、直ぐにアートを設営する。途中、沢田の足が痛むらしく心配であ
つたが、やや遅れて追つて来た滝川と石原氏に仕せて南川常保今井の3
名、先に唆催ばす。彼に入り相談の藤原、沢田は直ぐに池へという意見
であつたが、一旦置けば足の方も何とかなるだろうし、本谷から掘いて
行くのが順当であると考へられたので、よにかく見込のつくまで出合の
デントから本谷の捜索を行うことに決定した。

7月17日 (晴)

南川石原口・滝川常保寺井にて本谷を下からつめてみることにし出發す。
 東へ向くより大矢野、雪解けの水の流れたたるクレバスの上でもグッ
 とバット外からの陽光を浴びた時ほど、まさに目くらましの思ひである。
 クレバスもクレバス、滝も滝とジグザグに上つて、全然予想以上のまも見
 られたかたが、最後の滝を越えて晝食後、本谷上郎の雪場もつた所
 五木下野所近でも糸手袋ほどとの朝でゴウ・ークの隊使用せる、ビニ
 ル袋入りリマツ(佐原説)を発見した。帰途、又白地に立寄つたところ、
 池に幕當中の東雲山溪谷の方々のテントの側面に吊懸になつた門田製の水
 ツケルが主にかけてあり、五郎ちゃんもツケルらしく、石原も確認さ
 せ主張したので阿含大高氏佐原は既によく知つてゐた等の傳言を稱す
 ことにした。かたがた大高氏が帰る處、15日にオニテラスを通過した
 際に拾へたといふ事なビツケル発見箇所はゲルンに積んで来られた等
 な話をうかがひ、前記のビツケルを受取る。岩倉への帰途、中富新道で